

世界的な医療援助を続け、療協力に注目。卒業翌年の「アジア医師連絡協議会（AMD A）」本部・岡山市のメンバーで、昨秋に他界した篠原明さん（当時21）の活動の方向を決定づけたのは平成五年

## 異文化の厚い壁に苦悩

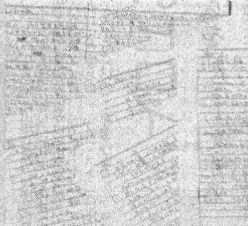
四月から三カ月間、ネパールの小都市・ダマックでブータン難民対象の医療協力に参加したことがあった。

小児科医を志して、関西医科大学に進学した篠原さんは、学生時代から国際医

療協力に注目。卒業翌年の四年にAMD Aに入会。五月には開業医だった父の診療記録は、異文化の壁を亡くしたものの、その三カ月後にネパールに出かけ、折とう師に頼って治療の機会を逃す人や、下痢が命

いれない。停電、断水、物が取りになる栄養不良、食料がない。とうとう下痢。しんどい。くるしい。困、カースト制度などに対する困惑…。

薬代が払えず重病の子を診察途中で連れて帰る親に、現地の人も歓迎されなかった。篠原さんだけに、悩みも大きかった。



難民キャンプでつづられた診療記録。文化の壁の大きさがその後の篠原さんの活動を決めた

相互理解、相互協力、理想は大きくふくらむが、単なる理想だけでは終わらせたくない。

結局、帰国後は、自宅の医院を閉鎖し、「元気なうちには途上国で働く」との決意を固めた。

この体験をもとに篠原さんは現地での診療活動について、日本小児科学会の雑誌にこう記した。

「熱帯医学の知識のみならず、活動地域の文化、習慣、経済状態などの社会的背景の把握が必要であると強く感じた」

基金に関する問い合わせはAMD A（☎086・284・7730）へ。協力は郵便振替〇二二五〇一四〇七〇九（「AMD A」篠原基金）

（社会部 吉村剛史）